

研究者の2つの側面にアプローチする～筑波大学附属図書館におけるプロモーション活動～

著者	斎藤 未夏
雑誌名	日本農学図書館協議会誌 (Bulletin of the Japan Association of Agricultural Librarians and Documentalists)
号	158
ページ	12-14
発行年	2010-06
その他のタイトル	Approach researchers in two aspects: Promotion activities in University of Tsukuba Library
URL	http://hdl.handle.net/2241/105301

研究者の2つの側面にアプローチする ～筑波大学附属図書館におけるプロモーション活動～

Approach researchers in two aspects:
Promotion activities in University of Tsukuba Library

斎藤 未夏 *

1. はじめに

筑波大学附属図書館では、1997年度の電子図書館システム導入以降、学内で生産された学術資料の電子化と発信に積極的に取り組んできた。2006年には国立情報学研究所の実施するCSI事業¹の委託機関となり、電子図書館システムでの蓄積をもとに、筑波大学機関リポジトリ「つくばリポジトリ」(Tulips-R)²の運用を開始した。2010年3月現在の総コンテンツ数は約22,500件で、学術雑誌掲載論文・学位論文・紀要論文を中心としたコンテンツの継続的な収集に努めている。

一方で当館は、同じく国立情報学研究所のCSI委託事業であるSCPJ (Society Copyright Policies in Japan) プロジェクトにおいて、主担当機関として積極的に活動している。本プロジェクトは正式名称を「オープンアクセスとセルフ・アーカイビングに関する著作権マネジメント・プロジェクト」といい、機関リポジトリのコンテンツ拡充に貢献することを目的として、国内学協会等を対象としたオープンアクセス方針（以下、OA方針）に関するアンケート調査を実施し、その結果を「学協会著作権ポリシーデータベース」(SCPJデータベース)³に掲載・公開するものである。2006年7月に、筑波大学・千葉大学・神戸大学の3大学により発足し、2008年度からは東京工業大学が加わり、現在4大学で活動を続けている。

つくばリポジトリにおけるコンテンツ拡充活動と、SCPJプロジェクトとしての活動は、一見すると、論文の「執筆者」（すなわち大学教員）と論文の「発行者」（すなわち学会関係者）というそれぞれ異なるものを対象としているように思われる。しかし実は、論文の「執筆者」

としての役割と「発行者」としての役割は一人の研究者に共存するものであり、2つの活動は、研究者にオープンアクセス（以下、OA）の考え方を届けそれに対する姿勢を問うという、一つの大きな使命のもとに行われているものといえる。

本稿では、当館におけるこれら2つの活動のプロモーション面について、論文の「執筆者」と「発行者」という研究者の2つの側面へのアプローチという視点から、その具体的な実施方法を紹介するとともに、活動の今後の展望について述べる。

2. 論文の「執筆者」にアプローチする

一つくばリポジトリにおけるコンテンツ拡充活動一

「執筆者」としての研究者（大学教員）には、①「機関リポジトリ」という「大学とその構成員が創造したデジタル資料の管理や発信を行うために、大学がそのコミュニティの構成員に提供する一連のサービス」(Lynch)⁴の存在を知らせる、②実際にコンテンツを提供してもらう、③サービスの効果と意義を実感してもらう、という三段階のアプローチを積極的に実践している。

第一の「つくばリポジトリの存在を知らせる」ための方法としては、当初、学内全教員につくばリポジトリに関するパンフレットを作成・送付したが、その後実施した研究室訪問などでは教員の認知度が高まったという感触は残念ながら得られなかった。そこで、教員との既存の接点を活用することとし、附属図書館に図書を寄贈してくださった教員へのお礼状には必ず、論文提供をお願いするシンプルなチラシとつくばリポジトリグッズを同

* 筑波大学附属図書館 〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1

Mika SAITO, University of Tsukuba Library, 1-1-1 Tennoudai, Tsukuba-shi, Ibaraki, Japan 305-8577

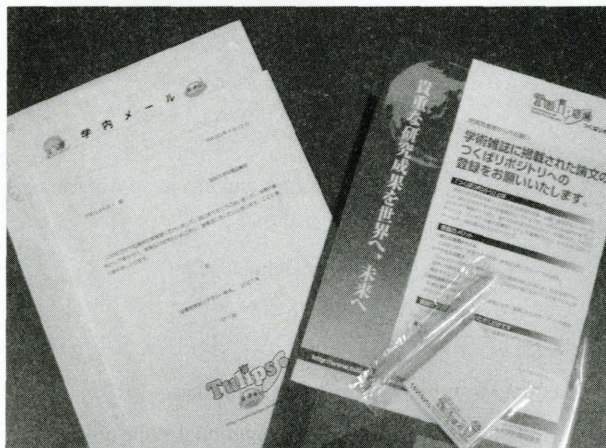


写真1 チラシとつくばリポジトリグッズ



写真2 勝手にコラボグッズ

封することにした（写真1）。また、2008年3月の図書館コーヒーショップの開店に合わせ、「勝手にコラボグッズ」を作成して（写真2：作成したのはコーヒータンブラー内にセットされた型紙のみ）オープンセレモニーに列席された学内執行部に配布し、つくばリポジトリをアピールした。その後このグッズをショップ内で配布させてもらったところ、学生の間でも評判となり、ブログでも紹介された⁵ほか、ショップから問合せが来るようになった。2009年4月には、2,000件目の学術雑誌論文の提供者で同月着任されたばかりの学長に、当該論文や研究の内容、学長としてつくばリポジトリに期待されることなどについてインタビューを実施し、その内容を公開した⁶。

第二の「実際にコンテンツを提供してもらう」方法としては、先行大学の実施例⁷を参考にして、2007年9月から、文献データベースのWeb of Science⁸に収録された本学教員の執筆論文のうちリポジトリに登録可能なものについて、教員にコンテンツ提供依頼メールを毎週送信することにした。2009年に送信したメールの合計は

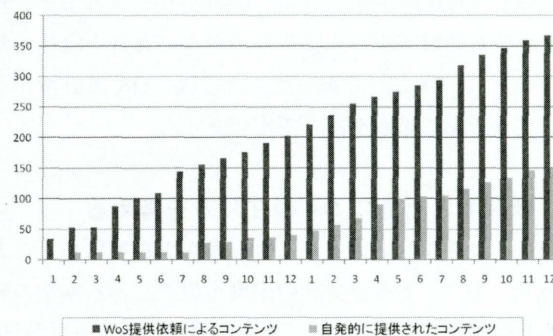


図1 Wos調査に基づく提供依頼によるコンテンツと自発的に提供されたコンテンツの累積数の推移

472件で、そのうちの約35%にあたる164件についてコンテンツの提供を受けて公開することができた。また、2009年に教員から自発的に提供されたコンテンツは108件で、2008年の41件から大きく増加した（図1）。

第三の「つくばリポジトリの効果と意義を実感してもらう」方法としては、2008年1月から、学術雑誌論文の提供に応じてくれた教員に、その論文の1か月のアクセス統計をお知らせするメールサービスを開始した。「国内外から多くのアクセスがあることに驚いた」「今後もコンテンツを提供したい」といった好意的なコメントが寄せられ、前述した自発的なコンテンツ提供へとつながっていると考えている。

3. 論文の「発行者」にアプローチする

— SCPJ プロジェクトの活動 —

一方、「発行者」としての研究者（学協会関係者）に対しては、SCPJプロジェクトの主担当機関としてOA方針に関するアンケート調査を継続する一方で、OAへの対応を検討し方針を明らかにするよう働きかける様々な活動を行ってきた。

2008年11月及び12月に国立情報学研究所／科学技術振興機構により開催された「学術雑誌電子化関連事業の連携・協力についての合同説明会」においては、参加した学協会関係者に対し、本プロジェクトの活動の説明と協力依頼を行った。また2010年2月には、国立情報学研究所で行われたクローズドな「SPARC Japan パートナー誌と大学図書館関係者との懇談会」に出席し、本プロジェクトの活動を紹介するとともに、SPARC Japan パートナー誌の学協会関係者と意見交換を行い、今後も継続的に情報共有の場を設けることで合意した。

学協会関係者とのこのようなFace to Faceのコミュニケーションを通じて明らかになってきたことは、学協会

には OA 方針を策定するうえで手掛かりとなる情報を得るための有効な手段がなく、そのために方針を決めかねている、ということであった。今後は、OA 方針策定を支援する活動に重点を置く予定である⁹。

4. 研究者とともに OA の在り方を考える

先日、つくばリポジトリにコンテンツを提供したことがあり、かつ、ある学会誌の編集委員でもある本学の研究者と接する機会があった。その学会誌の OA 方針が「検討中」であることに関する彼のコメントは、「本学がリポジトリ活動に力を入れていることは十分に知っているし、その意義も理解している。しかし学会誌編集委員としては、学会誌が売れなくなるのは困る。機関リポジトリと学会経営とを共に成り立たせるために、どのような OA 方針が望ましいのか。」というものだった。「執筆者」と「発行者」という 2 つの役割を共存させている研究者の、率直な心境であろう。

一方で、「学会誌を電子ジャーナル化するためには経費を捻出する必要がある。しかし、各論文の著者が責任を持って各機関リポジトリに自身の論文を登録すれば、それを集めることによって電子ジャーナルが完成するのではないかと考えている。そうなれば電子ジャーナル化の経費も不要だ。」といった、いわゆる「オーバーレイジャーナル」についての言及もあり、論文の「執筆者」と「発行者」にとって最適な OA の在り方を真剣に模索する研究者の姿を垣間見たように感じた。

最適な OA の在り方に唯一の正解があるわけではない。何を「最適」とするかは指標は、「執筆者」の研究分野や「発行者」の体制といった複数の要素によって様々に設定され得るだろう。

したがって今後は、最適な OA の在り方を模索する研究者に対する有用な支援活動の一つとして、OA 方針を決定した学会とその学会員へのインタビュー等のケース・スタディを実施することにより、「執筆者」と「発行者」に様々な実例を紹介していきたいと考えている。

参考文献等

- 1 国立情報学研究所 学術機関リポジトリ構築連携支援事業 <<http://www.nii.ac.jp/irp/>>
- 2 筑波大学機関リポジトリ「つくばリポジトリ」(Tulips-R) <<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/dspace/>>
- 3 学協会著作権ポリシーデータベース (SCPJ データベース) <<http://scpj.tulips.tsukuba.ac.jp/>>
- 4 Clifford A. Lynch. 「機関リポジトリ : デジタル時代における学術研究に不可欠のインフラストラクチャ」 <<http://www.nii.ac.jp/irp/archive/translation/arl/>> (原文) Lynch, Clifford A. "Institutional Repositories: Essential Infrastructure for Scholarship in the Digital Age" ARL, no. 226 (February 2003) : 1-7. <<http://www.arl.org/resources/pubs/br/br226/br226ir.shtml>>
- 5 min2-fly. 「かたつむりは電子図書館の夢を見るか」 <<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/20080412/1207993372>>
- 6 つくばリポジトリ (Tulips-R) 研究者インタビュー <https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/portal/tr_interview/interview.html>
- 7 例えば、以下の事例を参考にした。
川村路代. 「HUSCAP の広報活動と利用者フィードバック」平成 18 年度 CSI 委託事業報告交流会. ベルサール九段. 2007 年 7 月 3 日.
<<http://www.nii.ac.jp/irp/event/2007/debrief/pdf/1-1hokudai.pdf>>
- 8 Web of Science <<http://isiknowledge.com/>>
- 9 SCPJ プロジェクトの活動の詳細については下記を参照。
斎藤未夏. 「SCPJ プロジェクトの取組み—学協会の OA 方針の策定支援を目指して」 SPARC Japan News Letter No.3, p.1-4. <http://hdl.handle.net/2241/104386>